

県立図書館だより

平成23年10月

青森県立図書館報 第11号

「詩人・村次郎展」開催

青森県近代文学館では10月8日(土)から11月20日(日)まで、企画展示室(県立図書館2階)において「詩人・村次郎展」を開催します。

村次郎(1916~1998)は、三戸郡鮫村(現・八戸市鮫町)の石田家旅館の長男として生まれました。

慶應義塾大学でフランス文学を学び、詩誌「山の樹」を中心に作品を発表。中村真一郎や芥川比呂志、小山正孝らとともに活躍し、将来を嘱望された詩人でした。

戦後、八戸で「あのなっす・そさえて」を設立して郷里の文芸復興に努め、詩集『忘魚の歌』『風の歌』を刊行。

昭和27年、実家・石田家旅館の再建のため、文学活動からの離脱を決意した後も、県内外の文学者・文化人の尊敬を集め、郷土ゆかりの作家たちにも大きな影響を与えました。

今回の企画展では、生前刊行された詩集『忘魚の歌』『風の歌』に加え、未発表作品の原稿を新たに展示し、その作品世界の全貌を紹介します。また、郷里を愛した村次郎が情熱を注いだ大須賀海岸の自然・郷土芸能に関わる資料や、愛用の万年筆、膨大な蔵書などの遺品を展示し、生涯を概観します。

【資料紹介】

詩稿「Rendez-vous」

村次郎は、昭和27年、家業に専念するため詩作品の発表を絶ちますが、生涯にわたり詩作は続けていました。詩稿「Rendez-vous」は、未刊行詩集『餘業詩集』の中の1編です。詩集のタイトルには、旅館主人として詩は「余業」であるという意味と、すべて「4行詩」であるという意味が込められています。

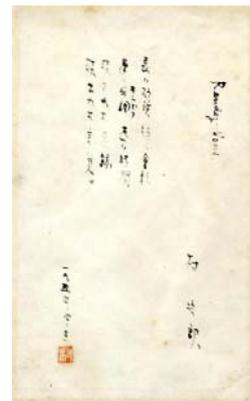
「長い砂浜 短い会話／遅い歩調 あしどり 速い時間／残された足跡／残された言葉」

砂浜を歩く二人の「ランデブー」が、選び抜かれたシンプルな言葉で、静かに印象的に描かれています。

※展示の詳細は、「開催中の企画展」(<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/murajiro.html>)をご覧ください。



村次郎(大須賀海岸にて)



目 次

「詩人・村次郎展」開催	1
相互貸借制度について	2
こんなレファレンスがありました	3~4
子どもの本の紹介	5
郷土資料の紹介	6
近代文学館資料の紹介	7
カウンターから一言	8

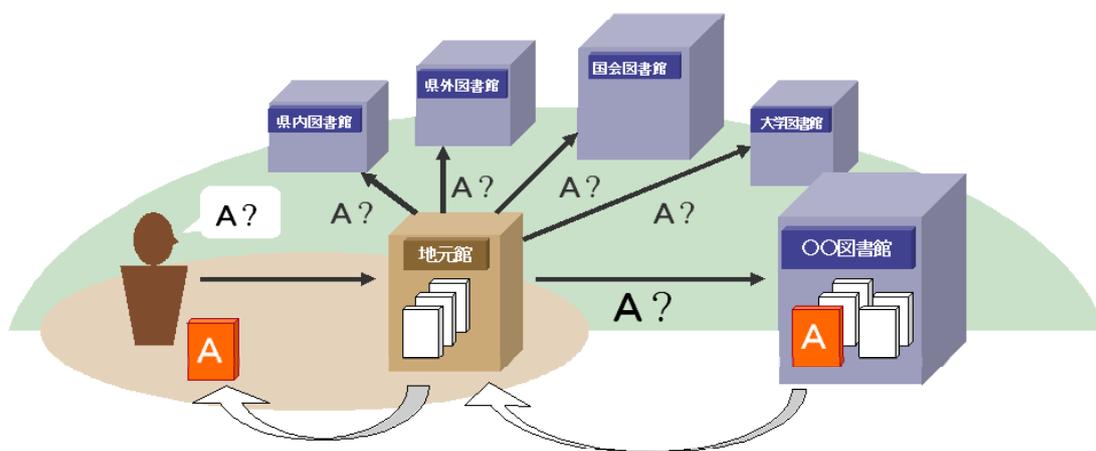
相互貸借制度

「読みたい本が地元の図書館にない！それなら…」

そうごたいしゃくせいど
相互貸借制度とは、地元の図書館や公民館図書室等に読みたい本の所蔵がない場合、図書館同士の貸し借りにより本を取り寄せ、地元の図書館等で貸出しを受けることができる制度のことです。

青森県では、青森県図書館情報ネットワークシステム（通称Applins（アプリンズ））により、データ提供館の蔵書の検索を行うことができます。

また、データ提供館でない、県内の図書館、公民館図書室等からも借り受けの申し込みができます。



青森県立図書館では、オンライン貸出サービスや遠隔地返却サービスを実施していますが、これらは県立図書館に所蔵がある場合のみ利用できるものです。

県内に読みたい本の所蔵がなければ、国立国会図書館、都道府県立図書館、大学図書館等からの取り寄せもできます。（一部貸出ができない資料や館内閲覧のみの資料もあります。）

利用・申込方法や借用期間は、図書館によって異なります。

県立図書館における貸し借りは無償で利用することができます。読みたい本について「どの図書館が持っているのか」、「借りることはできるのか」などの所蔵等についての確認が必要ですので、下記窓口までお気軽にお問い合わせください。

【県立図書館の相互貸借申込み窓口】

青森県立図書館 参考・郷土室 TEL017-729-4311

<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/mailref/request.html>

こんな レファレンスがありました



(第11回)

参考・郷土室では、「探している本が、どこの図書館にあるのか知りたい。」「こんなテーマの本はありますか。」「こういう事柄や人物を調べたいが、どんな本がありますか。」などというレファレンス（質問）に、図書館資料等を使って、お答えしています。そのレファレンスの中から、郷土や最近の話題を取り上げて紹介していきます。

「東日本大震災」雪が降る早春3月11日の発生から猛暑の夏、そして秋と月日は過ぎましたが、未曾有の災害の傷は未だに深く残り、復興への厳しさを伝えています。

青森県立図書館は、この震災の記録・教訓を伝え残していくことが図書館としての使命・責務と考え、体験者である田畑ヨシさんの紙芝居「つなみ」の実演（詳細は子どもの本の紹介ページ（5 p）をご覧ください。）、陸上自衛隊第9師団の災害派遣活動写真展示を開催しました。今後も、今回の震災によって得た教訓と、多くの尊い命が失われたことを忘れないよう災害関連の情報を発信していきたいと考えています。

今回は、**昭和三陸津波（昭和8年）**を紹介します。

【質問】 田畑ヨシさんが子どものときに体験した「昭和三陸津波」の青森での状況を知りたいのですが？

【回答】

三沢市四川目、太平洋の波が打寄せる海岸が間近に迫る小高い丘の上、金刀比羅神社境内に一つの記念碑が建っています。

碑の裏に刻まれた文は次のようにはじまります。
「維時昭和八年三月三日午前二時三十分四十八秒突如トシテ強震アリ爾後半刻ニシテ洋上遙カ大音響ヲ聞き閃光ノ発スルヲ見ルヤ間髪ヲ容レザルニ海嘯ノ襲フ所ト為ル（以下、略）」

田畑さんが8歳のときに経験した地震と津波です。青森県でも三沢、百石にかけて被害があり、尊い命を失っています。

三陸海岸から青森県の太平洋岸を襲った津波は、明治29年にもありました。その時の津波は、最高25メートルの高さがあったと云われ、二万七千人を超える人が犠牲となりました。三沢や八戸の海岸近くに住む人たちは、その時の経験・津波の怖さ、教訓を語り継いでいました。

例年なら春の足音も聞こえてきそうな“桃の節句”昭和8年のこの日、地震が発生した時刻の三沢の気温は、零下十度近くと、屋内にいても凍てつく寒さだったといえます。この地震の発生が真夜中であったこと、また、例年にない寒さであったことが再び悲劇を起こすこととなります。体験者の証言が残されています。

「～かつて私は、母から明治二十九年の恐ろしい津波のことを何度か聞かされていま



上 三沢市四川目にある
「震災記念碑」
左 碑に刻まれた標語

したので、津波のことが気がかりで炬燵の中に入り一夜を過ごそうと考えたのです。すると夫が私のことを案じ“さぶいがら早くねろ”と声をかけてくれ、また息子が私に“かつちゃおっかねえ（まさかこれが、最後の息子の言葉になろうとは夢にも思いませんでした。）”と怯えながら私を見つめるものですから、再び私も床に就いたのです。～」（『地震海鳴りほら津波 三陸津波50周年記念誌』より）

この直後に津波に襲われ、体験者は二人の子供のうち娘を助けることはできましたが、息子を失ってしまいます。

妻を案じた夫、子供を気遣った母親を決して責めることはできません。部落民全員が助かった隣の二川目でも、同様のことが起こりかけていたのです。

当時三本木警察署の署長であった福士重太郎氏の著書『事件と共に50年』に「三陸津波の教訓（昭和八年）」として、当時の様子が詳細に書かれています。震災発生後直ちに現地に向かった福士氏が最初に到着したのが二川目でした。そこで聞いたのは、部落全員が高台に避難したものの風が強く、皆、寒さに震えあがっていた。幼児が寒さと眠たさで泣きわめくような状況で、20分たっても津波が来ないため住民が家に帰ろうと言い出し、同調する者が続出した。しかし、部落会長が断固としてそれを押さえて間もなく、地震発生から27、8分後、波高24メートルの津波が襲い、建物は流失したものの全員助かったというものでした。

県内の被害の概要は、	死者・行方不明者	30名
	家屋の流失・損壊等	371戸
	船舶の流失・破損	754艘

（昭和8年3月30日調 青森県警察部）

四川目にある碑「震嘯災記念碑」は、今から78年前に起きたこの悲しい出来事を忘れず後世に語り継ぐため、大きな被害のあった県内四カ所、四川目、三川目、川口明神下（百石）、八戸市館鼻に、同年12月、朝日新聞社が募った義捐金の残余金で建てられたものです。

その碑文は、公募で当選した標語「**地震海鳴りほら津波**」で、当時の多久安信知事が揮毫しています。

私たち青森県民も、田畑さんの「てんでんこ」と同じように、先人の辛い体験と教訓を、この碑文とともに語り継いで行かなければならないのではないのでしょうか。

【参考資料】

- 『青森県警察史 下巻』青森県警察本部 1977年
- 『百石町誌 上巻』百石町 1985年
- 『地震海鳴りほら津波 三陸津波50周年記念誌』三沢市 1983年
- 『事件と共に50年 青森県大正・昭和秘話』福士重太郎著 東奥日報社 1971年
- 『昭和八年三陸震嘯誌』杜都文化社編 嶽麓書院 1933年
- 『明治29年宮城・岩手・青森三県大海嘯惨害の図』福田初次郎刻・発行 1896年
- 『東奥日報 昭和8年3月4日付 夕刊』他 東奥日報社
- 『昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告』中央气象台 1933年
- 『三陸沖強震及津波概報』中央气象台 1933年 他

●レファレンスは、電話・手紙・FAXのほか、電子メールでも受け付けています。

レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室

電話 017-729-4311

FAX 017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

子どもの本の紹介(第11回)

今年、3月11日に未曾有の大震災「東日本大震災」がありました。今もたびたび余震が続いています。この大震災により、多くの皆さんが命の大切さや人々との絆、災害や防災について改めて考えたのではないのでしょうか。

8月9日(火)、また9月4日(日)には「防災週間行事」として、青森県近代文学館ロビーにおいて「田畑ヨシさんによる紙芝居実演会」(青森県立図書館主催)を開催しました。

紙芝居の作者・読み手である田畑ヨシさんは、岩手県宮古市田老地区で約30年にわたり、自作の紙芝居「つなみ」を使い、地域の子どもたちや修学旅行生など、たくさんの人々に津波の恐ろしさを伝え続けてきました。

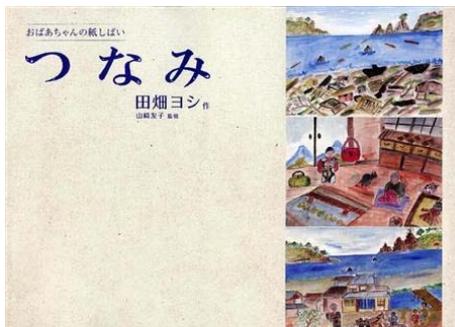
紙芝居には、1933(昭和8)年の昭和三陸大津波で、田畑さんが経験した貴重な体験が描かれています。

そして、2011(平成23)年7月、自作の紙芝居「つなみ」が『つなみ おばあちゃんの紙しばい』というタイトルで出版されました。

絵本の1頁目「はじめに」に、「田畑さんは、「最も怖いのは、忘れてしまうこと」だと言います」と記されています。



9月4日
紙芝居実演会の様子



『つなみ おばあちゃんの紙しばい』

田畑ヨシ/作 山崎友子/監修

産経新聞出版 2011

(E タバタ*ヨ A04B)

(定価 1500円)

また、地震の津波により、一頭のカバの赤ちゃんに起きたできごととも絵本になっています。

2004(平成16)年12月、インドネシア(スマトラ島沖)地震のあと、ケニアのサバキ川に波が押し寄せ、カバたちが波にさらわれました。お母さんや仲間とはぐれた一頭のカバの赤ちゃんは、その波に流され、ケニアのマリンディという町の海岸に打ち上げられました。

その後、カバの赤ちゃんは、ケニアから800キロメートルも離れたモンバサという町のハラー動物保護公園で、「オーウェン」という名前が付けられ、他のカバと一緒に安心して暮らしています。

『ママ つなみでママをなくしたカバの赤ちゃんがあたらしいママを見つけるまで』ジャネット・ウィンター/作 福本友美子/訳 小学館 2007

(小E ウィンタ*ジ A06A)

郷土資料
の紹介
(第11回)

青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様幅広くご利用いただいております。

このコーナーでは、当館所蔵の郷土資料の中から、普段は人目に触れる機会の少ない貴重な資料などをご紹介します。

今回ご紹介するのは、弘前市出身の版画家・今純三（1893～1944）の作品『青森県画譜』（東奥日報社 1934）です。

少年時代に家族とともに上京した純三は、第七回文展や第一回帝展に入選するなど新進気鋭の洋画家として活躍しますが、関東大震災を機に青森市に転居。当時まだ珍しかった銅版画や石版画の制作・研究に取り組むとともに、関野準一郎ら後進の育成に当たり、版画王国・青森の基礎を築きました。

一方、純三の兄・和次郎（1888～1973）は、震災後も大学教授として東京に残り、現代風俗を調査・記録する考現学の創始者となります。

和次郎からの依頼を受けて青森の風俗採集を行う中で、「郷土の自然と人にと就いて其の真相を描写」（「作者の言葉」『青森県画譜』）したいと考えた純三は、県全域をめぐる写生旅行から版下の制作・解説の執筆まですべて一人でこなし、文字通り寝食を忘れて計100点の版画からなる『青森県画譜』を制作しました。

自然・風俗・建築物など昭和初期の県内各地の事物を、考現学的な視点で正確に表現した版画と解説からは、郷土に対する純三の深い愛情が感じられます。純三が画家の道を歩むことに反対していた和次郎も、『青森県画譜』については「これこそ純三にとっての一生一代の最も適当したしごとである」「これこの通り青森県でやったもののように、各県で作って見たらよかろうと誇示できる」（「純三と今度の仕事」『サンデー東奥』1933. 9. 17）と手放しで絶賛しました。



青森市新町通夜景

美術作品としてのみならず、現在では当時の青森の風土と生活を知るうえでも大変貴重な資料となっている『青森県画譜』は、書庫に保管しており、閲覧が可能です。また、1973年刊の復刻版については貸出も可能ですので、ご希望の方は当館職員にお申しつけ下さい。



御料馬花鳥號銅像

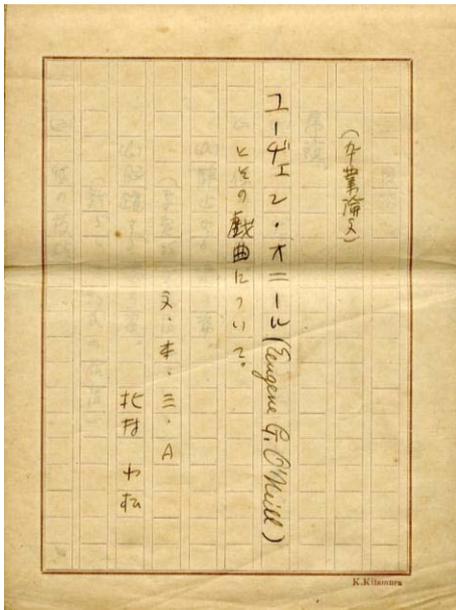
なお、青森県立郷土館では、企画展「今純三と考現学展」が2011年10月28日(金)から11月27日(日)まで、また、青森県立美術館では、企画展「今和次郎採集講義」が10月29日(土)から12月11日(日)まで開催されます。

近代文学館資料の紹介 (第11回)

北村小松ゆかりの新収蔵資料

青森県近代文学館では本年春、日本初の本格的トーキー映画「マダムと女房」のシナリオ作者であり、劇作家・小説家としても活躍した北村小松の生誕110年展を開催しました。この企画展開催を機に、北村家御遺族から数多くの貴重な資料を御寄贈いただきました。今回は、その中から2点を紹介します。

卒業論文「ユーチェン・オニールとその戯曲について」



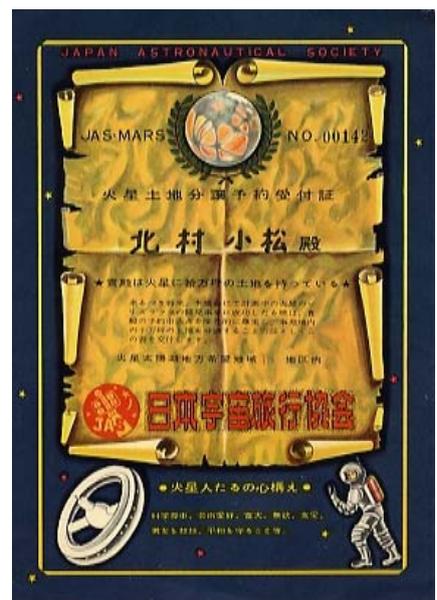
北村小松は1901（明治34）年に八戸町で生まれ、八戸中学を卒業後、慶応義塾大学に進みました。1920（大正9）年、小山内薫が所長を務める松竹キネマ研究所の研究生となり、翌年には手掛けた脚本が初めて映画化されました。

1922（大正11）年には帝国劇場10周年記念募集脚本で入選。英文科在学中からシナリオ作者として活躍した小松は、卒業論文ではアメリカの劇作家、ユーゲン・オニールを取り上げています。「K. Kitamura」専用原稿用紙247枚に綴られたオニール論は、小松の若き日の劇作への飽くなき情熱が感じられる直筆資料です。

火星土地分譲予約受付証

小松は63年の生涯で70数冊の著書を刊行しました。その大半は小説ですが『限りなき舗道』など新聞小説から、軍事冒険小説を経て『結婚期』などユーモア小説まで、様々な作風を展開しました。

このほか単行本には収められなかった業績として、戦後のSFでの活躍が挙げられます。ラジオのニュースで未確認飛行物体に興味を抱いた小松は、1950（昭和25）年以降「空とぶ円ばん」など多くの円盤小説を発表しました。昭和30年代には日本宇宙旅行協会の役員に就任。同会から発行された火星土地分譲予約受付証は、大宇宙を見据えた小松晩年の活動を偲ばせてくれる遺品です。



※これら北村小松の新収蔵資料は11月23日まで、常設展示室で公開しています

カウンターから一言 (第11回)



今回は、**資料を誤って破ったり、汚してしまった際の取扱い**についてです。

利用者の皆様からお返しいただいた本は、中に貸出票や私物が挟んだままになっていないかなど、ページをめくって確認の作業を行っています。



写真1

その際、たまにページが破れていたり、シミなどの汚れを目にすることがあります。

破れたページをセロハンテープやメンディングテープなどで補修してお返しいただく場合がありますが、それらのテープは**経年劣化**によってかえって資料を傷めてしまいます。(写真1)

また、一度ついてしまった**シミや水分によるゆがみ**は、気づいてすぐに拭き取っても、乾いた時にはしっかり汚れとなって残ってしまうのです。(写真2)

当館で所蔵する多くの本は、永年保存され、後世に引き継がれていきますので、取扱いには十分ご注意くださいようご協力をお願いします。



写真2

万が一、借りた本を破いた、あるいは汚してしまったという場合は、**ご自身で補修したり、ブックポストなどにそのままお返しにならず、カウンターまでお持ちになって、お申し出ください。**

他の方の利用に支障があると判断した場合は、代替の現物による弁償の手続きをお願いする場合があります。

なお、**借りた本に汚破損などがあった場合も、お返しの際にお声がけ**くださるとありがたいです。

後に読まれる方が気持ちよく手に取れるよう、ご協力をよろしくお願いします。



編集後記

今回は津波に関するレファレンス事例や本を紹介しました。“天災は忘れられたる頃来る”という名言で知られる寺田寅彦は、その随筆「津波と人間」(「寺田寅彦全集 第七巻」)の中で、“地震や津波は～頑固に、保守的に執念深くやって来る～”なのであって、それを人間が忘れるから災害が起こるといい、科学者としてのもどかしさを滲ませています。

先人の記憶や知恵が記録されたものが本です。図書館では折に触れて、いろいろなテーマに沿った本を紹介してまいります。